

自ら考え、伝え合い、学びを深める児童の育成 ～主体的・対話的で深い学びを目指して～

目指す児童像

問題や資料から必要な情報を集め、自分の考えや思いをもつことができる子

既習事項や互いの考えの利点を理解し、課題に応じた方法を見付け活用できる子

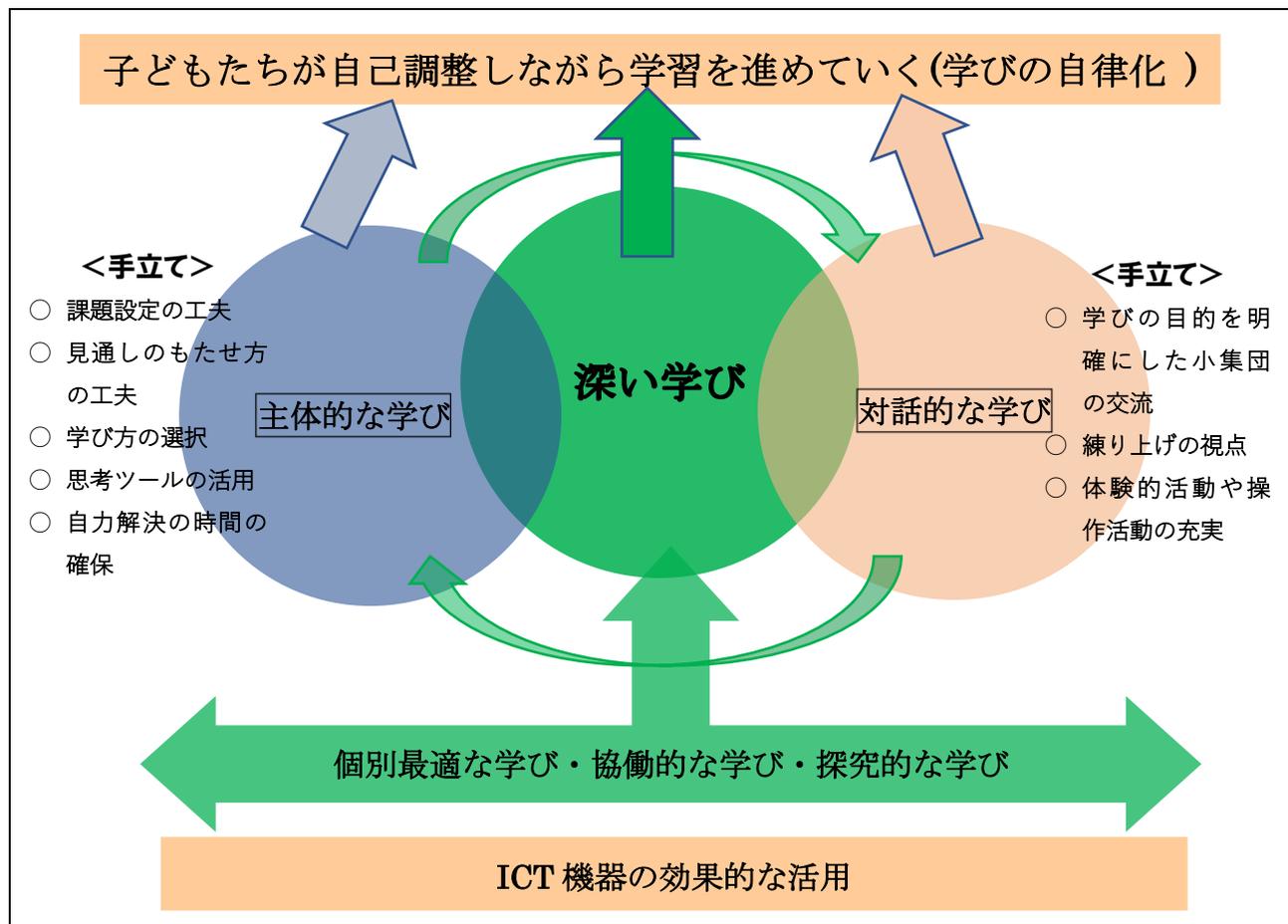
自分の考えを様々な方法を用いて説明したり、相手の考えや思いを受け止め自分と比べたりできる子

新たな課題を自分で見いだしたり、自分に合った学び方を選択したりできる子

〈研究仮説〉

授業における「深い学びに到達した児童の姿」を設定し、その実現に向けた授業の工夫を検証して実践することで、児童一人ひとりが自分の考えや思いをもち、それらを積極的に伝え合いながら、お互いの考えを共有し合うことで、深い学びが実現するであろう。

研究構想図



令和4年度の実践



詳細な指導案・実践報告・成果報告はこちらからご覧ください

社会



思考ツールで立場の共有

話し相手を選択して交流



相手を選択しながら交流活動を活発化するための、思考ツール・ICT機器を活用したお互いの立場や考えの可視化

体育



楽しい「動物にへんしん」

「パンとついて！」擬音語の活用



運動を行う楽しさを味わうことができる場面設定や一つ一つの知識（分かる）・技能（できる）につながりをもつことができる指導の工夫

グローバルスタディ



学習形態の複線化

振り返りの共同編集



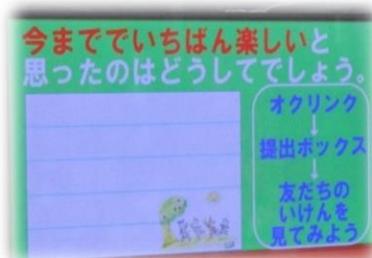
学習方法を自分に合った形に調整するための、学習形態の複線化やICTを活用した振り返りの共同編集

道徳



全員で参加する動作化・役割演技

ICT活用した意見の共有



体験的に考えるための動作化や役割演技の充実と、ICT機器を活用した対話による納得解を得るための交流の仕方の工夫

辻南小学校 深い学びに到達した児童像

教科	柱① 情報の分析	柱② 考えの形成 ・再構築	柱③ 既習・新知識 の活用	柱④ 課題発見
	深い学びポイントとの関連			
	3自力 4協働	3自力 4協働 5練り上げ	2見通す 3自力 4協働 5練り上げ	1つかむ 2見通す 6メタ認知
国語	◇ 「読むこと」において、言葉にこだわりをもって読み、読み取ったこと(題名、人物、場面、心情)の関係性をより多く発見することができる。	◇ 自分と友達の意見を比較・統合しながら、自分の考えを再構築することができる。	◇ 「読むこと」において、文中の言葉を根拠にしたり、自信の経験とからめたりしながら考えたことを自分の言葉でまとめることができる。	◇ 学習の過程を振り返り、「何ができるようになったか」自覚している。
社会	◇ 資料から問題解決に必要な情報を見極めて読み取り、読み取ったことに対する自分なりの考えを表現することができる。	◇ 自分と友達の考えの共通点や相違点に気が付き、互いのよさを認め合いながら社会的事象に対する自分の考えを再構築することができる。 ◇ 自身の経験・体験や既習事項を基にしながら、社会的事象とどのように関わっていくか適切に判断し、表現している。	◇ 学んだことを日常生活や他教科の中で生かして学んでいる。	◇ 社会的事象を自分事として捉え、学習問題について必要感をもって主体的に調べている。
算数	◇ 問題解決に必要な情報を様々なデータから見極めて自分の考えを整理する。	◇ 自分の考えと友達の考えを比較、検討しながら自分の考えを再構築することができる。	◇ 整理した考えとこれまでの学びを活用することができる。	◇ 新たな疑問や課題をもったり、自分の力に合った問題を選択したりすることができる。
理科	◇ 実験結果などの情報を見極めて、再構築する。	◇ 協働的な活動を通して、自分の考え方を整理している。 ◇ 根拠を基に自分でまとめ(結果の考察)を表現することができる。	◇ 既習事項を生かして予想や仮説をもち、それらを基にして観察・実験の方法を考えることができる。	◇ 既習の見方・考え方を次の学習や、日常生活における問題や課題の発見に生かすことができる。
グローバル・スタディ	◇ 単元ごとに学習した表現を基に、自分で場に応じた正しい伝え方を考え、受け取り手がその目的を、自分が伝えた英語によって達成することができる。 ◇ 主体的に学習を進め、試行錯誤することにより、丁寧な対話を英語ですることができ、思考の過程で自分の考えを具現化し、英語で伝えることができる。	◇ 自分の与えられた課題を達成する中で、他者の意見を交えたり、自分の意見を考え直したりすることで目的が達成できる。	◇ 既習事項を想起させながら、どのような表現が活用できるかのイメージを児童にもたせ、新知識を活用し自分の言いたいことを英語で話すことができる。	◇ 他者と対話したり、友達の発表を聞いたりして、自分の考えを深め、日常生活にどう生かしていくかを考えることができる。 ◇ 単元を通して、学習した表現や語彙を活用し、自分が本当に伝えたいことを、既習表現や新出表現を使い、相手に伝えることができる。 ◇ 英語を学習することによって、英語をより日常の中で身近に感じることができるようにする。
音楽	◇ 共通事項〔音楽を形作っている要素とその働き〕を基に、音楽の特徴を捉えることができる。また、共通事項を要とし、自分の意図を表現したり自分の思いをもって言葉で表したり、音楽表現をすることができる。	◇ 共通事項〔音楽を形作っている要素とその働き〕を理解し、音楽表現の幅を広げ、また、協働して音楽活動を行うことにより、自己の表わしたい音楽表現を深め、再構築している。	◇ 何度も繰り返し試したり、話し合ったり、振り返ったりしながら曲想や音を形作っている要素とその働きと向き合い、音楽表現の細部までこだわることができる。	◇ 様々な音楽経験を積み、自分の音楽表現を生かして音楽への関わり方を見付けることができる。また、学習を振り返り、曲想に応じたよりよい音楽表現を考えることができる。
体育	◇ 運動が「できる」と、運動が成功するためのポイントが「分かる」ことをつなげることができる。	◇ 課題の解決に向けて、試行錯誤を重ねながら思考を深め、よりよく解決できる。	◇ これまでの運動経験を基に、新たに取り組む運動に必要な技能を考え、実践することができる。	◇ 学習を振り返って課題を修正したり、新たな課題を設定したりすることができる。 ◇ 運動を行う楽しさを味わい、(普段の生活でも)積極的に運動を行うことができる。
道徳	<p>○一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠や、その時の心情を様々な視点から捉え考えようとしている。 ・自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている。 ・複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取りうる行動を多面的・多角的に考えようとしている。 <p>○価値の理解を自分との関わりの中で深めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている。 ・現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直している。 ・道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的な価値の理解を更に深めている。 ・道徳的価値を実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしている。 <p>○話し合うことで、自分の考えを深めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師や他の児童の発言に聞き入っている。 ・教師や他の児童の発言から考えを深めようとしている。 ・既習の内容と関連付けて考えている。 			

研究概要

身に付けさせたい力を明確にし、児童がその到達に向けて複数の学び方から自分に合うやり方を自ら選択できるようにする。また、個々の考えを児童・教材・教職員等と交流する活動を、交流の視点を明確にして行う。そのことにより、自分に合ったやり方で調整力を働かせながら、自律的に学ぶ児童を育てる。

研究の内容

様々な教科における「深い学びに到達した児童の姿」を具体化し、それを実現するための指導の工夫について教科ごとに協議を行い、その姿を一般化する活動を通して「深い学び」への理解を深めるとともに、ICT 機器の活用法も検討しながら常日頃から個別最適な学びや学びの自律化、探求化を可能とする授業実践を行うことができるようにする。

○成果と●課題

<令和4年度市学習状況調査と令和5年度全国学力・学習状況調査の結果から>

調査結果	○成果と●課題
約97%の児童が学習においてICT機器を使うのが効果的であると回答している。	○ ICT 機器に有用感を感じられるような学習活動を積極的に行うことができた。 ○ タブレットを活用した学習活動によって、字を書くのが苦手な児童が豊かな表現力を発揮したり、気になったことをその場ですぐに調べて学習に生かしたりするなど、情報収集や自己表現の部分で主体的かつ個別最適な学びを展開する児童が増えた。
授業において課題解決のために自分で考え、自分で取り組もうとしている児童の割合が87%を超えたが、令和5年度は令和4年度の値を下回った。	○ 課題提示の工夫や学習形態を工夫した活動の複線化などの実践を通して、自分にあったやり方や自分にできる方法で以前よりも主体的に課題解決のために活動に取り組む児童が増えた。 ● 学習計画や課題を板書や掲示せずタブレットで確認するようになったため、「いつでも見られる＝見ようと思わなければ見ない」という状況になり、「つかむ」「見通す」が困難になる児童が見られるようになったと思われ、そうした児童への支援の仕方について検討する必要がある。
友達との話し合い活動で、自分の考えを広げたり深めたりすることを肯定的に捉える児童が90%を超えた。	○ 深い学びを目指した意図的な話し合い活動の設定を通して、話し合い活動が自身の考え方の再構築に役立つことや協働で学びを進めていくために重要な役割を果たしていることを児童自身が認識できており、重要な学び方の一つとして位置付けられた。 ● 今年度までの実践では、話し合い活動が教師主導で全体として行われることが多く、話し合う場面をより児童自身が選択する活動も取り入れていきたい。
学習を振り返り、次の学習につなげているかどうかについて、96%の児童が肯定的に捉えている。	○ 振り返りにクラウドを活用する実践が増えたため、自分だけでなく他者の学びも確認しやすくなり、メタ認知により自身の学びを調整しようとする意識が生まれてきた。 ● 「じ・し・ゃ・く」の観点で考えると、「次の学びを自分でどう進めていくか」児童自身が選択できるような実践がまだまだ乏しい。

<学校課題研修全体に関して>

- 令和4・5年度で合わせて約100本の公開授業、各グループの代表者・研究授業者による研究授業を12本実施することができ、授業改善の視点や教材研究の在り方、自身の指導観の見直しなど、授業実践を通して教職員一人ひとりが授業スキルの向上・授業改善につなげることができた。
- 幅広い実践報告書の作成や成果報告会の実施など、お互いの成果と課題を共有する機会を設定することができた。
- 幅広い教科から自身が研究する教科を選択できるようにしたことで、自身のキャリアや興味関心を最大限に生かして、教職員一人ひとりがアクティブに研修を進めていくことができた。
- 教科が多岐にわたっている点や、少人数グループでそれぞれに研修を展開したため、学校としての「深い学びに到達した児童像」を今後構築していく必要がある。